
東方雷鳴伝

ネギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方雷鳴伝

【コード】

N09350

【作者名】

ネギ

【あらすじ】

東方の世界に転生するお話です。

この作品は主人公チート、テンプレ、作者の妄想が含まれていません。

気分を害される方は、ブラウザを閉じるか、戻るボタンを連打若しくは、電源をお切りください。(え

ブローグ 神の試練とかねえわ・・・(前書き)

また・・・やってしまった・・・

短編に上げちゃったよーーーー!!!! OTZ

プロローグ 神の試練とかねえわ・・・

「なあそこの兄ちゃん」

「兄ちゃんではない。神だ。」

「ああ、そう、じゃあ神（死）。」

「なんだ！ その不吉なカツコは！」

「あーもう。 とつと俺が死んだ理由聞かせてくれ。神とやら。」

「ふむ。 お前は俺の孫が落としたスプーンで死んだ。」

「は？」

「見た目からしてだが・・・」

「いや、だからな？ 俺の孫が離乳食を食べていたスプーンが手から滑り落ちてお前に当たって死んだよ。」

「ほう・・・ その程度の理由で・・・」

「なにか言うことはあるか？」

「ごめんちゃい」

若いーちゃんが つけて謝ってもキモイ・・・

「キモイとか言うなし！」

「えらいフランクな神だな・・・　つか、天界でもスプーンとか使ってるのかよ・・・」

「うむ。神力がとてつもないがな！」

「使い辛え！」

なんだコレ・・・

ああ、状況説明が必要だったかな。　俺は　素野雷也
しらのらいや

親がつけたDQNネーム以外は平凡

東方シリーズに目が無いしがない高校2年生だ。

そこっ！ゲーマーとか言うな！　廃人と呼べ！

コホン。

んで、さっきから目の前の駄神（笑）が言ってるように俺はどっせ
ら死んだらしい。

向いっつのミスで。

この駄神（笑）がっ！！！！

ちなみに駄神はさつきから体の回りにバチバチと雷を纏ってる。
何なんだこいつ？

「さつきより俺ひどくなくてない？」

「気のせいだクソ神（笑）」

「思ってることよりひでえ！？」

神様の威厳とかどこ行っただし・・・

「・・・んで？ 神とやら。俺はどうなる？」

「ああ、それなら心配要らんぞ。 転生させてやる。」

「元の世界か？」

「いや、お前の体もう焼かれてるし。」

「まあそうだろうな。 ちなみにどんな死体だったんだ？」

死因・・・スプーン

笑えねえよっ！

「んゝ・・・ 簡単に言えばスプラッタってところか？」

「頭にスプーンが刺さった程度で？」

「まあ、頭はトマトのようにグチャット・・・な？」

「さいでつか。」

親まじびびっただろうな・・・ どうでもいいけど。

「んで？ そんな俺をどこに転生させてくれるんだい？」

「ああ・・・ お前は今魂だけでこの空間に存在してる。その魂を入れる器をこちらで用意しよう。」

「んで、世界は？ どうせ異世界なんだろう？」

「おう。 世界はお主の意思に一番強く残っていた・・・なんだっ
たか？」

「東方か？」

「そう！それだ！ 東方とやらの世界に行ってもらおうぞ！」

ほう・・・この馱神は・・・

「そんな魑魅魍魎が跋扈してるような世界に行けと・・・？ そう
いうのか？」

「いやいやいや！！ ちゃんと肉体は廃スペック・・・もといハイ
スペックで送るぞ！？」

「ふむ・・・ならいいのだが・・・」

「おつ！ この世界には能力の保持が可能だな・・・ ひとつ何か
言ってみねえか？」

「ん？ いいのか？ だったら・・・ “アンタの力”をくれ。」
「そういうと、」

今まで笑顔だった神の表情が消え、 怒りを含んだ苦笑いになる。

おまけに眉がピクピク動いている。

「お前・・・なに言ったかわかってんのか？」

「ああ、わかっているさ。 神の力をよこせと言った。」

「つまり、神の末席に加えると？」

「まあ、遠まわしにそういつてるようなもんだな。」

「ほう・・・ じゃあ、ためさせてもらってもいいか？」

「何をだ？」

だんだんと、神から放たれる殺気が大きいものになる。

「お前、生前になんか武術やってたろ？」

「ああ、あれか・・・」

なんかゲームの技とかが出たくて、体鍛えてたな・・・
主にテイルズだが・・・ 気は最後まで出せなかった。

「まあ、武術つちゃあ武術だが・・・」

「それで俺に1発でも届いたらいいぜ？」

まじかよ・・・ 半分冗談だったんだが・・・

「半分は本気だろ？ 俺が認めたら、能力とは別につけてやるか？」

「俺が負けたら？」

「魂ごと消滅してもらっただけだ。」

おお。 死亡フラグか！

「おもしれえ！ やってやんよ！」

ああ！ 俺のバカ！

その場の乗りで行動しないってあの日心に決めたでしょ！！・・・
嘘です。決めてません。

「その意気やよし。 俺も人間の体で戦ってやろう！」

そういうと、神の力が急速に収まっていくのが見えた。

「名を問おう。 愚者よ。」

「俺の名は 素野雷也。」

「ククク、我が力と同じ名を持つか！」

やべえ、コレさっきまでの神と同一人物か？ すごい威圧感なんだが・・・

「我が名は素戔嗚

スサノオ

！！ 雷鳴暴風を司る者なり！」

ま、なるようになれってんだ。

「行くぜっ！！！」

「推して参れっ！」

結論から言おう。

「弱くね？ お前。」

「うるせー！ 俺だつて始めて人間の体になつたんだ！ こんなに弱いとは思わなかつたんだよ！」

こいつ、本気で人間の体でかかつてきてさ。 雷も神力も封印したの忘れてやがった……

最初から全力で行つたらボコボコにしてしまった。

ゴメン。

「まあ、約束は破れんしな。 ほれ、俺の力存分に使うといい。」

「？ 何か変わったか？」

「バカヤロウ！ 神力がダンチなんだよ！」

言葉遣いが…… さっきまでのカリスマどこ行つたし。

「まあ、これは向こうで追々使うとして…… もうひとつ能力いんだつたな？」

「ああ、二言は無い。」

「じゃあ、“静と動を操る程度の能力”をくれ。」

「ほう。 これは面白そうな能力だな……。 よしわかった。コレでいいか？」

「つか、素戔嗚殴りすぎて、顔ボロボコなってるし。

結構イケメンだったんだが・・・

「誰のせいだと思ってる!？」

「自分の慢心だな。」

「言い返せないっ!」

「まあ、ありがとよ、素戔嗚。」

「はっ・・・せいぜい第2の人生楽しんでこいよ?」

カッコイイけど、顔が・・・

「ああ、じゃあな。」

ただ・・・

どう考えてもアイツ、こうなるのわかってたよなあ・・・

俺の意識は途絶えた。

プロローグ 神の試練とかねえわ・・・（後書き）

他の2作も全然書いてないのに3作目突入！

書きたかったんだもん！

・・・すいませんでした。

第一話 雷鳴と共に。(前書き)

ポイントに5ptずつ入ってて驚きました

心臓とまるかと思いました。

第一話 雷鳴と共に。

雷鳴轟く何処とも知れぬ高原に、
俺は一筋の閃光と共にこの世界に生まれた。

そこには遮蔽物は全く無く、
ただ雄大な自然が広がっていた。

ふと隣を見ると、そこには素戔嗚が立っていた。

「なんでここに？」

「いんや、お前がちゃんと転生できたかと思ってな。」

「そいつはどうも。この通り 成功だぜ？」

手を広げ、アピール。

あまり視野が変わらないことから、俺は生前とあまり変わらない体格らしい。

「みたいだな。 でだ。 お前に伝えなきゃならんことがある。」

「なんだ？」

すると、少し悔しそうな顔をして、素戔嗚は言葉を紡ぎ始めた。

「まず、お前自身についてだ。」

お前には本当に神の力をやるつもりだった。」

「だった？」

「ああ。だが、やはり曲がりなりにも元は人間のお前を神の末席に加えるのは不可能だった。というか、お偉いさんどもに反対されたんでな。すまん。」

「まあ、仕方ないわな。土台無理な話だったし。」

少し残念ではあるが。

「そう言ってもらえると助かる。でだ。あんまりにも悔しかったから、お前を雷の妖怪として転生させた。」

「そうか……って……え？」

今なんて言った？

「いや、だから、雷の妖怪として転生させ、妖力で操れるようにした。」

「……うおい。」

俺が……妖怪……？

「仕方ないだろ？ 人間のままじゃ俺の力は使えないからな。」

「だからつつつて人の身から勝手に……」

「あー。心配すんな。“体は”妖怪だが、“魂は”人間だ。」

それはそれで・・・

「それって・・・大丈夫なのか？」

少し不安である。 中身と外が違つとどっちかが影響を受けそうだから・・・

「大丈夫だ。俺がそういうふうにな”創つた”からな。それに、そうやって二つに分けることで、1人1能力の枠組みを無理矢理外してる。」

こいつサラッとすごいことやってるな・・・

「器と内容物に一つずつって事か？」

「だな。 本能的に雷は扱えるはずだ。 というか、お前自身が雷だ。」

「じゃあ、雷になって空を飛び回るとか・・・」

「おそろくできると思う。 まあその辺は自分でやってくれ。」

「そうか・・・」

魂は・・・人間・・・
なら、まあ、いいか。

「おいおい、さっきまで自分を妖怪にしたのを怒ってたんじゃないのかよ？」

嘲るように素戔嗚は言った。

「ああ。まあ魂が人間なら、身は妖怪だとしても自分を見失わないで歩いて行けそうだからな。」

いつの間にか雨は止み、雲の切れ間から光が射し込んでいた。

目の前に広がる高原に虹がかかっている。

「・・・それに、こんな経験も悪くないかなと思ってな。」

不本意ながらも一度死んだ。
そして生き返る。

なんてあり得ないことだからな。

「そーかい・・・ならもう何も言わんよ。行くといい。？原初の妖雷鳴を司る者よ。」

そういつて素戔嗚は消えて行った。

「おっ、行ってくる。」

虚空に向かって呟いた後には、一陣の風が吹いた。

「さて・・・行きますかね。行く宛も無いけど。」

・・・そしてふと気付いた。

「原初の妖って・・・どゆこと?？」

俺が・・・

?? 最初の・・・

?? ? 妖怪???

まさか・・・

「原作前とか・・・??？」

ダラダラと嫌な汗が流れる。

俺はすぐに雷化し、辺りを見て回る事にした。

すると、高原の中央部ほどに、小さな集落を見つけた……のはいのだが。

「……俺の格好って……ダメじゃね？ 時代的に。」

今気付いたのだが、俺の服装は、

上は紺色の甚平の裾に白い稲妻がデザインされているというもので、下は同じく紺色の袴であった。

対して、相手はほぼ丸裸。獣の皮とか使っているような時代。旧石器時代とかその辺である。

当然、不審がられる。石投げられるのコンボを食らって、俺退散？
くそう。こんな昔に送られたなんて。

で。まあ近くの森に棲むことにしたんだけど。
(妖怪だからこっちの字であってるよね?)

暇。

話相手が居ないとか本当に暇。

他の妖怪が全く居ない。

仕方無いから20年近く精神統一をして妖力の質と量を高めたり、自分の記憶の中の武術の型を練習して身体能力を上げたり、自分の能力とか試したりしてみた。

素戔嗚の言った通り、雷は本能的に操れたし、” 静と動を操る程度の能力” もきちんと思えた。

これが中々便利で、「静」の方は、自分の不老はもちろん、食べ物や傷まないようにすることもできた。

食べ物つつつても猪とか果物とかだが。

ちなみに時間は静止させることはできなかった。

無念。

「動」の方は、動かない物体を動かす（転移させる）こともできるし、加速・減速さらには巻戻しまでもすることが出来た。これは逆方向に「動かして」いるからだと考えられる。

これにより、怪我をしても、治すことができた。

そして雷は、自分を雷化しての移動はもちろん、雷を纏って攻撃したり（ぶつちやけていうと、雷切まがいのこと）、雷を辺りに放出したり、剣にして切る（というか焼き切る）こともできた。

あと、時々俺が棲んでる場所に（かなりの山奥である）人が迷い込んで来たりもした。そういうときは、雷で誘導して集落に帰してやることもあった。

また、村が妖怪に襲われた時は、できる限り助けた。自己満足だ
がな。

そしたらなんか雷神様とかいって崇められてた。

それ以来俺は集落に降りて行くようになった。

服装は不審がられたが、まあそこはそれ。

集落が襲われないように守り神まがいのこともしたっけ。

そんなこんなで1000年程経った。

「・・・と、今までの事を振り返って見る。」

「一体さつきから誰に向かって話してんだい？らいてん雷天？」

声の方を向くと、瓢箪を持った鬼の女性が立っていた。

「気にするな。桜鬼おんきよ。」

話しかけてきたのは鬼神の桜鬼。

俺がこの世界に生まれてから30年ぐらいした頃に生まれた。

なぜ分かったかというと、俺の山で生まれたからだ。

生まれたときはとても小さく、弱々しい存在だったが、俺の妖気を
分けることで、自我を持ち、力強い鬼となった。

本人は俺が妖気を与えたことなんぞ覚えてないだろうが・・・

ちなみに雷天というのは俺の名だ。

元の名前を少し変えて名乗る事にした。

以来、話相手兼組み手の相手になってもらっている。

勝率は俺：桜鬼：引き分けで8：1：1ってところか。

生きた年数が違っしな。

ただ、その後も鬼は増加し、元俺の山は今では鬼の山になってしまっている。

まー、話相手が増えるのはいいんだが・・・

飲み相手をさせられるのは勘弁願いたい。

それと、

生まれた直後から酒を持ってたつてのはどうなんだろうか？

すごい酒への執着心である。

「アンタって時々訳わからんこと喋るよね・・・ まあ、そんなことより、だ。 近くの森に天狗が棲みついたらしいよ？」

と、桜鬼が瓢箪の酒を煽りながら言う。

「ほう・・・ で？なんかあったのか？」

「いや、仲間を何人が行かせただけだね、近々この山を攻めるつもりらしいんだよ。」

・・・ あ？もう酒ねえや。 おーい！もう一本持ってこーい！！

「飲み過ぎだ馬鹿者。 しかし・・・天狗か・・・」

「どうする？こっちからふっかけるかい？」

追加の酒を受け取り、俺の杯に注ぐ。

「いやいや、奇襲はお前らの流儀に反するだろう？」

「うーか、そろそろ酔いが・・・」

「だけど・・・さ。相手にする量が・・・」

どうやら鬼神ともあろう者でも尻込みするような量らしい。

ふむ・・・どうしたものか。

このまま行けば、この山が天狗に管理され、「妖怪の山」となるのだろう。

だが、俺自身、この慣れ親しんだ山から追い出されるのは正直ムカつく。

「仕方無い。 明日、俺が天狗とやらにあって来るとしよう。」

少しお灸を添えてやるか・・・

すると桜鬼は、

「・・・本当に大丈夫かい？」

などと言いやがった。

「たく・・・」

「俺を誰だと思ってる？ 雷神の雷天様だぞ？」

そう尊大に言っていると、桜鬼は表情を崩し・・・

「ハハツ！！ 違うないねっ！」

と酒を煽った。

「・・・さて、と。」

「?? ? ?そろそろやるかい？」

おもむろに桜鬼が立ち上がる。

組み手の時間だ。

周りで宴会をしていた鬼たちも、俺たちの組み手を肴にしよつと集まって来る。

組み手のルールは殺さない事。
能力はもちろん使う。

ちなみに桜鬼の能力は、”土を操る程度の能力”だ。

言ってしまうえば、？金術みたいに地面を隆起させたり、槍にしたり、足場を創り出すこともできる。

それに、能力抜きでも地震を起こせる程の力を持つ。

「・・・能力の説明はこんなものか。」

「もう突っ込まないよ・・・？」

そう言いつつも桜鬼は構えをとる。

半身になり、足を広げ腰を落とし手を膝についた状態。

気合十分といった構えだ。

対して俺は正面を向いたまま、肩幅に足を開き、少し重心を左足にかけ、手はダラリと下に垂らす。

この100年で最も自分に合った構えだ。

静まり返った場に一陣の風が吹き、

2人の間に

一枚の木の葉が宙を舞って・・・

落ちた。

第一話 雷鳴と共に。(後書き)

御指摘を下さった方

ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0935o/>

東方雷鳴伝

2010年10月11日16時40分発行